

子どもの成長変化に対応した 子ども部屋のあり方に関する考察

—20歳代前半の若者による子ども部屋居住歴から—

竹田喜美子・小森佑子

Contemplation on Children's Rooms Corresponding to the Child's Growth

—Analyses of Residential History Concerning Children's Rooms Recollected by
Youngsters Who Are in Their Early 20s

Kimiko TAKEDA and Yuko KOMORI

A fragment of recent transmogrified society can be seen in the increase of bewildered juvenile murderers and this situation is being discussed from different angles. Children grow up mainly in their own room and the space significantly influences their growth. It is indeed their cocoon after birth. But how does the cocoon actually function? Has it not turned into a cauldron of evil spirits? The researchers first analyzed the 175 provided partly open-ended detailed questionnaire answers by urban youngsters in their early 20s recollecting their lives in their own rooms.

The rooms functioned in some ways as a playing room, a study, a shelter to find themselves, or a space to keep themselves placid. As they grew up, they began avoiding intrusions by parents and controlled the room to protect their privacy though not perfectly. The door was always the borderline between parents and children, and we propose that it can be remodeled in some ways to use effectively for better communication with parents. This could avoid inexplicable incidents. For example translucent door material might allow parents catch the atmosphere, or a curtain at the door would more freely be able to hide or show messages of both sides. We call this idea 'the sign of door'.

Key words: children's room (子ども部屋), residential history (居住歴), privacy (プライバシー), control (管理), parent-child relationship (親子関係)

1. はじめに

1) 研究目的

平成9年5月に起こった酒鬼薔薇・神戸連続児童殺傷事件は、これまでの少年事件とは明らかに質が異なっていた。非行歴がなく普段は目立たない、わずか14歳の少年が数ヶ月の間に凶悪な犯行を重ねていたのである。この事件の検証結果を聞いていると、少年の「心の闇」に焦点が当てられ、少年の家庭環境に問題があったと騒がれる。「家庭環境」として報道される主なことは、「子育ての誤り」「父親の不在」「母親の厳格な躾」等である。また、『家』の間取りに関しては、玄関から家族と顔を合わせずにすむ子ど

も部屋の位置が指摘された。犯行の一部が自宅で行われたにもかかわらず、同居する両親が気づけなかったのかが問題となった。殺人を犯した少年は、子ども部屋でどんな思いで過ごしていたのだろうか。その後17歳や12歳の少年による殺人事件が続く。彼らは、どんな子ども部屋を与えられていたのだろうか。少年事件をきっかけに酒鬼薔薇世代の若者の子ども部屋に関心をもつようになった。

また、子ども部屋に焦点をあてたのは、そこでの生活から、子どもの生活の全貌とまではいかないが誰に気遣うこともないありのままの姿を把握することが可能であると考えたからである。

本来、子ども部屋は子どもを自立させるための空間であ

る。しかし、現実には子どもを孤立させる子ども部屋が目につくことが多い。子どもにとって子ども部屋は人格形成の場であり親子関係を築く場でもある。子ども部屋は子どもの成長と共に変化するものであるが、子ども部屋の機能が子どもの成長に合わない場合、子どもは孤立化していくのだろう。子どもの自立を支える子ども部屋のあり方を子どもの成長段階に応じて明らかにすることが本論の目的である。

2) 研究方法

子どもの自立は、子どものプライバシー意識の発達と親子関係の変化のなかで達成されるものである。そこで子ども部屋に対する認識とパーソナル装置の導入から子どものプライバシー意識を把握し、子ども部屋に関する管理主体から親子の関係を捉える。子どもの成長段階は、学校教育と関わりが深いので、小学前期（7～9歳）、小学後期（10～12歳）、中学期（13～15歳）、高校期（16～18歳）、青年期（19歳以上）の5段階に分類する。

20歳代前半のいわゆる酒鬼薔薇世代の若者は、どのような子ども部屋でどのように過ごしてきたのか。彼らの子ども部屋居住歴を縦断的に把握し、成長変化に対応した子ども部屋のあり方に対する指針を得たい。なお、分析にあたり、アンケートの自由記述部分を重視した。

3) 調査概要

20歳代前半の男女を中心に子ども部屋に関する、自由記述を含むアンケート調査を実施した。アンケート内容は、子ども部屋の所有状況の変化、設置される機器、主要な生活行為、使用時間、家族の出入り、鍵の有無、扉の開閉等々である。調査対象はテレビゲームの元祖とも言われる「ファミリーコンピュータ」が発売された1983年前後に生まれ、『ゲーム世代』と言われて育ってきた20歳代前半の大学生が中心である。この世代は少年犯罪の増加が指摘された年代でもあり、これから社会を担っていくとする世代でもある。アンケート配布数は250部、そのうち回収数213部（回収率85%）、有効回答数は175部である。調査期間は、2005年10月から11月である。

調査対象の基本属性は表1に示す。

2. 現在の子ども部屋概況

1) 規模と使用形態

子ども部屋の規模（表2）は、4畳から20畳で、平均6.8畳である。しかし、専有型の場合は6.4畳、共有型の場合は7.5畳と、その差は約1.0畳である。態様は専有型が9割弱、共有型が1割強である。

2) 所有機器と行為

子ども部屋に設置されている機器は、日常生活機器と設備機器、情報機器に分類できる（図1）。日常生活機器が最も多く、就寝更衣関係（ベッド・タンスなど）、勉強関係（机・本棚など）、休息関係（ソファなど）がある。次に多いのが情報機器で、音楽関係、テレビ関係、パソコン関係に分けられる。設備関係としてエアコン、ストーブ、扇風機などがある。

また、子ども部屋で行われる主要な行為は、睡眠、音楽鑑賞、勉強、読書、考えごと、電話などである（図2）。なかでも音楽鑑賞が9割と高率である。その他にパソコン、テレビ、接客、飲食がある。

3) 子ども部屋に対する不満

子ども部屋に対する不満に関しては、175名中102名（58%）が「不満あり」と答え、理由は（図3）、広さ不足・収納不足・設備不足が中心で、他に部屋の位置などがある。

4) 自宅で落ち着く場所

また「住宅内でもっとも落ち着く場所はどこか」という質問に対して、図4のように子ども部屋以外の空間を選んだのは34%である。しかし、共有型の場合は6割を超える。共有型で平均7.5畳というのは、自己を確立しようにも、自分の領域を確保できない狭さである。そのストレス

表1 調査対象の属性

性別	男性	女性	
	45名(25.7%)	130名(74.3%)	
年齢	20歳	21歳	22歳
	17名(9.7%)	43名(24.69%)	73名(41.7%)
	23歳	24歳	25歳
	25名(14.3%)	10名(5.7%)	7名(4.0%)
居住地	東京、及び東京近郊		
親との居住関係	同居	別居	
	131名(74.9%)	44名(25.1%)	
きょうだい人数	1人	2人	3人
	22名(12.6%)	100名(57.1%)	46名(26.3%)
	4人		
	7名(4.0%)		
職業	大学生	社会人	
	157名(89.7%)	18名(10.3%)	

表2 現在の子ども部屋の規模

計	～4.5畳	6畳	8畳	10畳	12畳	14畳～	その他	不明
175	17 9.7%	68 38.9%	42 24.0%	5 2.9%	8 4.6%	3 1.7%	23 13.1%	9 5.1%

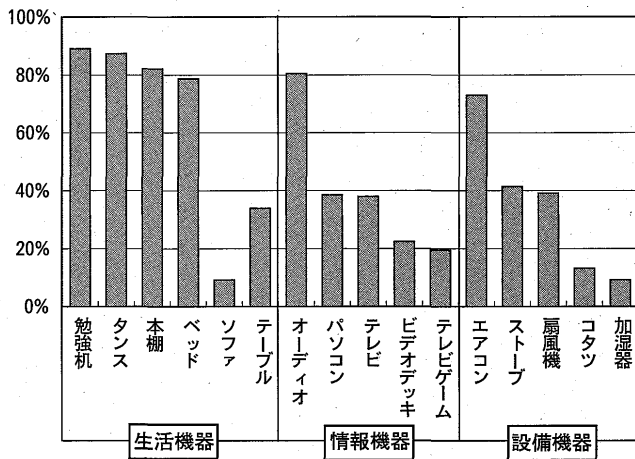


図1 子ども部屋に設置される機器

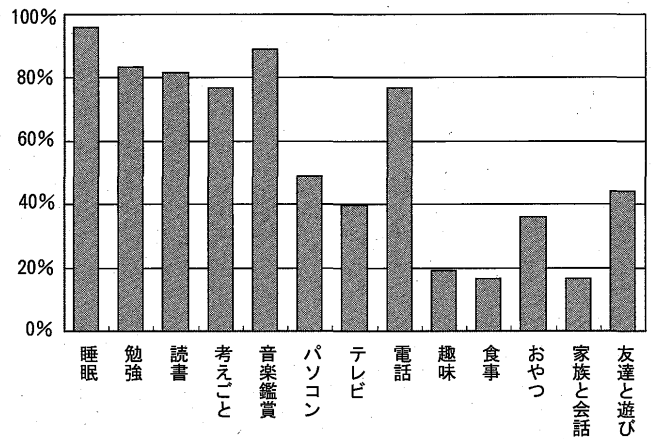


図2 子ども部屋で行われる行為

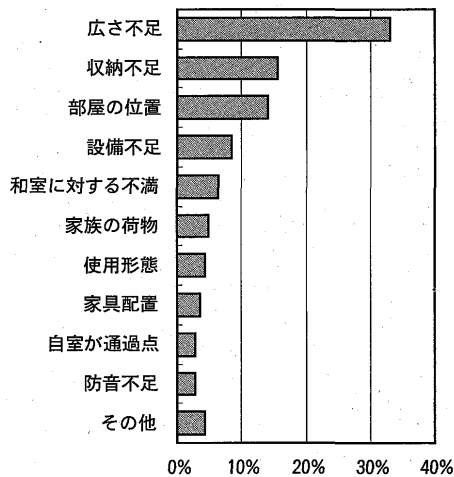


図3 子ども部屋に対する不満内容

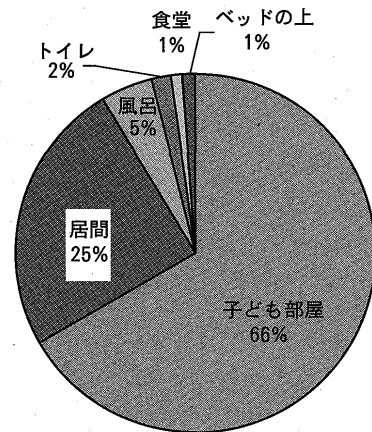


図4 自宅でもっとも落ち着く場所

は、親が考えるよりも大きなものと思われる。子ども部屋が自分の居場所にはなっていない証拠である。

3. 子ども部屋に対する認識

1) 初めての子ども部屋からの変化

初めて子ども部屋を持つ時期として、最も多いのは6歳(34%)。次いで7歳(13%)、5歳(11%)の順である。小学校入学がきっかけとなり、初めて部屋が与えられている。この時期、子ども自らが部屋を欲しがることが少なく、親が学校教育の開始に合わせて、『自立のための第一歩』、『勉強のため』という理由で、子ども部屋を与えているようだ。そして、小学後期までに95%の割合で部屋を所有している。しかし、小学期のうちは、自由記述からも判るように、子ども部屋を『自分の持物を置く場』『遊び場』と捉えている。とくに「物への所有意識」からの認識が圧倒的に多い。その認識は学年が上がるとともに少しずつ

つ変化している。11~12歳になると、勉強する場所がリビングなどの家族スペースから、子ども部屋へと変化し、『自分の部屋で勉強するようになった』『ここが自分の部屋という実感があった』と当時を振り返る記述がみられる。子ども部屋を個人スペースとして認識し始めている。それを証するかのように、使用形態の専有型が小学前期は3割台であったのが小学後期になると7割を超える。

その後、本人もしくは兄弟の教育課程の変化と共に、使用形態を変えながら、16~17歳までには専有型が9割弱となる(図5)。高校期になると、自宅の増改築や新築もほとんど完了しており、子どもが大学受験を迎える前までに完全な個室を与えようとする親の姿勢が窺われる。

多くの子どもが個室を与えられる16~17歳という時期においても、兄弟共有の場合は子どもにどのような影響があるのかを、専有型と比べて分析した。

子ども部屋共有経験者が感じた利点と欠点に関して、利

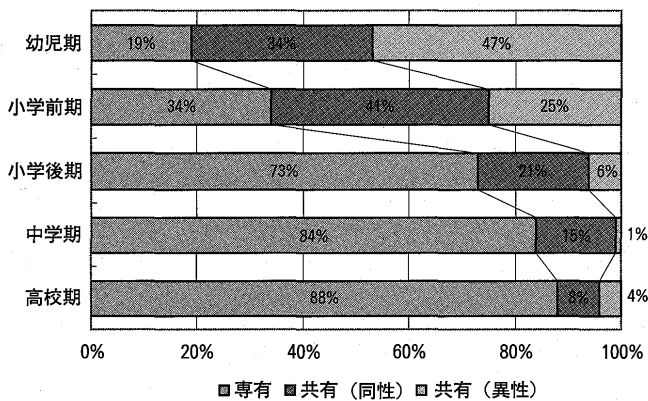


図5 成長時期別子ども部屋使用形態

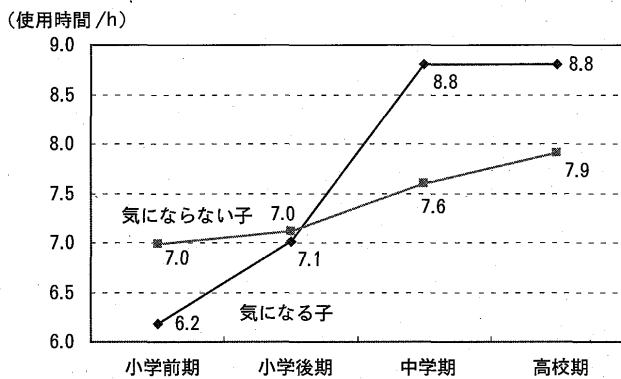


図7 成長時期別子ども部屋使用時間

点については、共有時期により内容が異なり、欠点については時期に関わらず同じ内容である。小学期に共有していた場合の利点は『寂しい時』『寝る時』『一緒に遊べる』という内容が多く、中学高校期になると『親について話し合う時』『悩みを相談する時』といった内容が目立つ。兄弟が、楽しい時間を共有する存在から、成長と共に同じ家庭に育つ人間として、悩みを共有しあう存在へと移行変化していることがわかる。不満については時期に関わらず『友達を家に呼ぶ時』『兄弟喧嘩をした時』『電話をする時』『泣きたい時』『音楽を聴く時』が共通するものである。が、中学高校期に共有経験がある場合は、『寝る時間帯が違う時』『生活リズムが兄弟で変わってきた時』『一人になりたい時』が著しく増える。本人と兄弟の教育課程が上下した場合にみられる。教育課程が進むほど、勉強や起床、就寝などの生活時間帯にずれが表れる。また、『一人になりたい時』という回答が増加する。中学高校期になると自宅滞在時間が減少する一方で、自室使用時間が中学期で6.5割、高校期で7割と、小学時期の1.5~2割増となっているこ

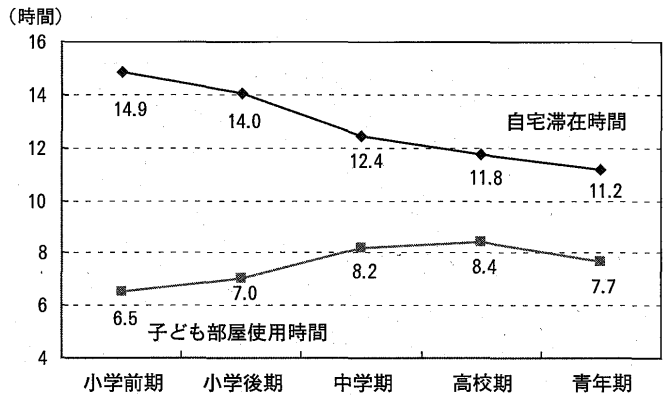


図6 成長時期別自宅滞在時間と子ども部屋使用時間

とからもこの要求は切実である(図6)。

以上のことから、長期間の兄弟共有は兄弟関係に支障をきたすといえる。そして、現在も部屋を共有している兄弟をみると、ほぼ姉妹であることが分かった。男女混合の兄弟に関しても、初めのうちは性別に関わらず年齢順に1人部屋を優先的に与えられてきたが、中学入学頃から男兄弟優先で1人部屋が与えられ、『弟に部屋を与える必要があった』という理由で姉と妹が同室を使用するという事例が少なからずみられる。

2) 子ども部屋を自室と意識し始める時

子ども部屋に私性を強く求め始める時、自分以外の人間が部屋に入出入りすることに関して、どう受け止めているのか。「気になる」が87名、「気にならない」が85名で、意見は両極化した。「気になる」場合と「気にならない」場合、それぞれの子どもの部屋使用時間の平均を時期別にみると(図7)、中学高校期になると一時間ほどの差が見られる。家族の出入りが「気になる」子どもの自室使用時間を追うと、「気にならない」子どもに比べ、中学期に差が開き、高校期にも続く。子ども部屋の使用時間が急増するときは、子どもの生活が変位する時期でもある。

「気になる」時期をみると小学後期が30%、中学期が65%、高校期が50%を占めていた。このように“自分”という人間を確立していく中学期になると、家族の出入りを気にし始める場合が多く、子ども部屋を意識し始めることが認められる。そして、出入りが気になる対象として最も多いのが母親だった。母親の出入りが気になる時期に偏りはなく、理由も『自分の様子を見に来る』『掃除をしに来る』といった何かの目的に伴う出入りであった。それに比べて、父親が意識されるのは中学期に偏っており、実際に入られたのではなく『着替える際に入ってくるのではないかと心配になる』というものである。これは調査回答者の

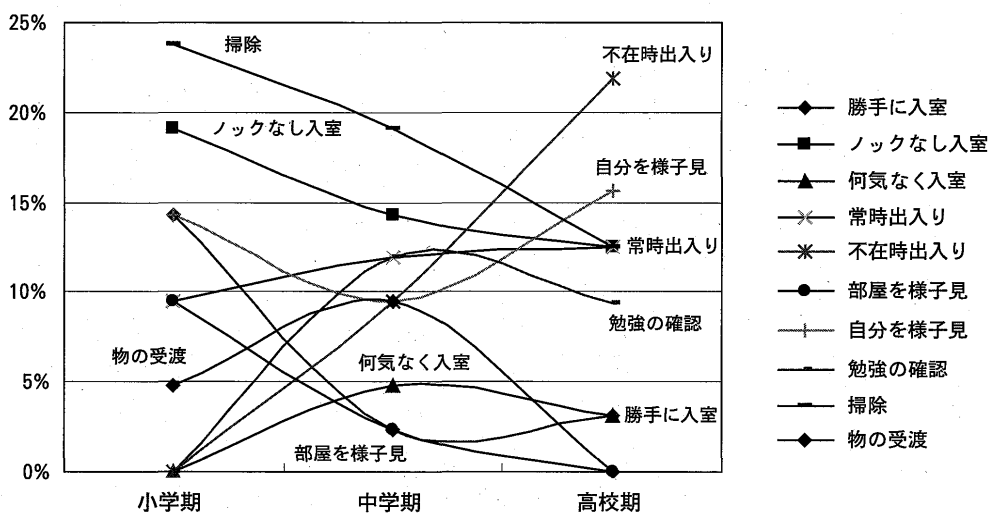


図8 成長時期別子ども部屋への家族の出入り傾向

大部分が女性であることから父親を異性と捉えているからであろう。次に「気になる」理由の変化とその時期に見られる家族の出入りに関する傾向を、アンケートの自由記述からみる(図8)。大きくは、入室方法、入室時間、入室目的に分けられる。まず入室目的である“様子見”であるが、『自分の様子を見に来る』、『部屋の様子を見に来る』、『勉強しているか確かめに来る』がある。「自分の様子」や「部屋の様子」のカーブは谷を描いている。「勉強を確かめに来る」のカーブは山を描いている。子どもが家族の入室をどう捉えるかによる違いから、この結果が導かれたと考えられる。中学期に入り、「勉強しなくては」という本人の自覚が無意識に働いているからであろう。

家族の無断入室の減少は、子どもの自室に対する意識が強まっていることを示す。

入室時間に関しては、段階的に急激な増加を見せるのが「不在時入室」である。それだけ日常、子ども部屋の中で本人が誰にも邪魔されず一人きりで行いたい行為がなされているのではないか。“常時入室”という記述に関して詳しくみると、『一人になりたい時に部屋に入るのだから、そんな時ぐらいそっとしておいて欲しい』と、明確な意思表示をしていることからすれば、家族は子どもの強い願いに無頓着である蓋然性が高い。これを理解することが、親と子の関係を築く上でも重要となるに違いない。

4. 子ども部屋での自立意識と行為

1) 子ども部屋に居るのは「一人になりたい」時

子ども部屋は、一人になることができる空間であるが、ここでは、それを認識しているかどうかをみる。「子ども

部屋に一人きりで閉じこもりたくなったことはありますか？」という質問に、7割以上が思ったことがあると回答した。さらにその時期をみると、小学期は3割と低率だったが、中学期になると9割、高校期になるとほぼ10割と飛躍的に伸びている。子ども部屋への家族の出入りが気になりだした時期も「中学期」「高校期」の割合が高かったことから同傾向にあることがわかる。これらの時期は、子ども達が子ども部屋に入ることによって一人になることを望み、家族と距離を置こうとしていると判断される。一人になりたい理由を自由記述からみると(図9)、家族とのこと、学校・勉強のこと、人生上の悩み、精神的な落ち込みに分類できる。まず目立つのは、大幅に減少する“家族との喧嘩”。小学期から高校期までの間に、その数値は半分以下になっている。この中には『怒られた』との記述も含まれており、この減少の要因は、年齢が低いほど、両親や兄弟との喧嘩、親から怒られた時に受ける衝撃は大きく、影響が強いためだと思われる。また、“親との関係が不安定”がある。これに関する記述には、『今振り返るとあの時が反抗期で、親や家族と話すのが面倒だった』とある。この2つの傾向をみると、小学期には、親や兄弟に反抗し彼らとの喧嘩が増え、中学高校期には、大人に対する嫌悪感から親との接触を断つ兆しがあるのではないか。親から離れて自立を図ろうとする時期であり、自分の世界を持ち、家族以外の仲間との関係を大切に始める。そこで、家族との会話量を時期別に図10でみると、やはり漸次減少する傾向にある。小学期のうちは子ども部屋使用時間も短く、リビングに居ることが多いため、家族との接触もかなりあり、会話量も増える。しかし、中学高校期になると、自宅内での「子ど

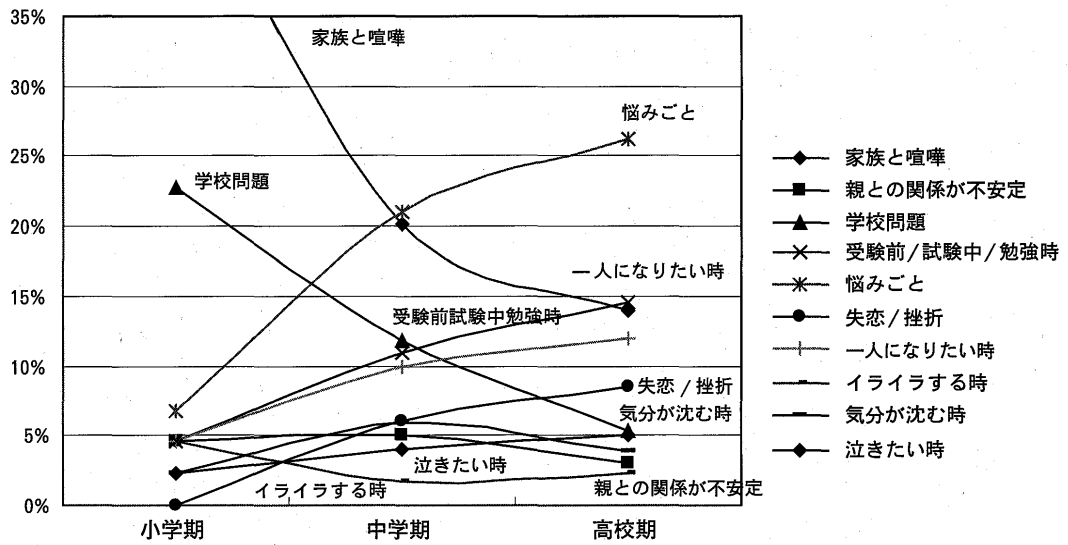


図9 成長時期別子ども部屋で一人になりたい理由

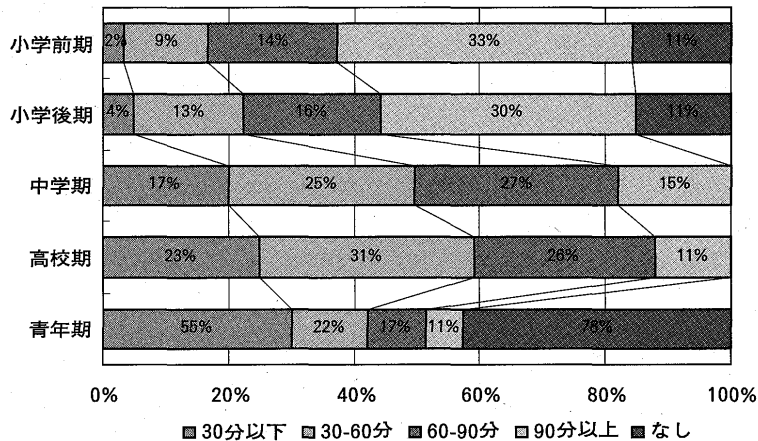


図10 成長時期別家族との会話時間

も部屋」を意識し始め、そこでの生活が中心になり、家族との会話量も減ってくる。

再び、図9にもどると、増加しているのは「悩みごと」、「失恋/挫折」、「受験前/試験中/勉強時」である。「悩みごと」の内容をみると、『友達ともめた時』『部活動で先輩(後輩)との関係をうまく築けない時』『進路決定を迷った時』『自分の存在理由がわからなかった時』等の記載がみられる。また、それに付随するかのように『一人になりたい時』も徐々に増える。学校内の出来事でも、家族には打ち明けにくい問題も増えているようだ。

『イライラしていた』『気分が沈んでいた、落ち込んでいた』『泣きたいとき』の理由も一定の数値で存在する。反抗期にある子ども達は情緒不安定であることを示している。そんな時、鍵の存在は子ども部屋の利用にどう影響するのか。鍵付きの部屋を与えられているのは25名で、その鍵

を頻繁に使用するのは4名と少ない。しかし、鍵の有無に関わらず、常時扉を閉鎖しているのは80名と、全体の半数を占めていた。

2) 子ども部屋での行為から見えること

個人差があるものの、中学高校期になると子ども達が親と距離をとり始めることは、子ども部屋への家族の出入りを気にしたり、自室を一人になれる場所として使用したりする率が高いことから十分認識できる。そこで、各時期の子ども部屋での中心になる行為は何かを知るために、各時期において最も時間を費やした行為を3つ挙げてもらった。小学前期から青年期への変化を図11に示す。

小学前期後期共に『友達と遊ぶ』『勉強をする』『本を読む』『家族との会話』の4つが、上位を占めている。小学期には子ども部屋をコミュニケーションの場として捉えて

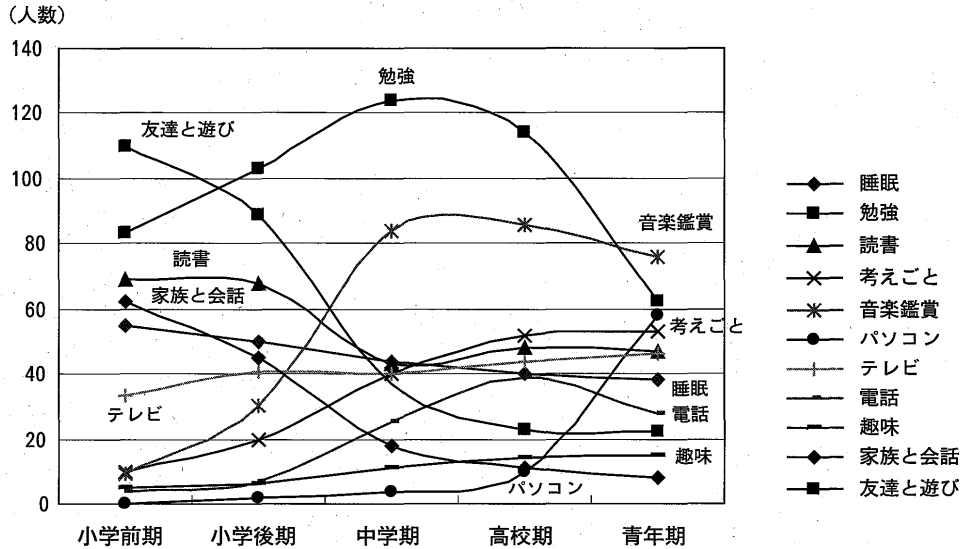


図 11 成長時期別子ども部屋での主要生活行為

いることが認められる。その後『友達と遊ぶ』と『家族との会話』の行為は、下降を続けている。人格を形成する上で強い力を持つ認知力が、乳幼児期と同様に著しく発達するといわれるのが小学期である。この時期にされる日頃の体験が、子どもの身体的感覚を通して吸収され、その後に大きく影響してくると思われる。

中学期になると『勉強をする』が優先され、つぎに『音楽を聴く』『本を読む』『テレビを見る』が上位を占める。なかでも『音楽を聴く』が飛躍的な上昇を見せる。「音楽」を媒介にして同世代の仲間と、親とは異なる若者文化を共有するのであろう。親とは一定の距離を保とうという意向が感じられる。

子どもの自立が目的で子ども部屋を与えるならば、親は自立を促す約束事を提案する必要がある。親の出入りを一番気にする時期であることから、親側も入室に関してはマナーを守るなど、お互いの立場を尊重する姿勢が求められる。

高校期は、ほぼ中学期と同様であるが、『考えごとをする』が増加する。一人で行う行為が生活の大部分を占めている。さまざまな挫折や葛藤を抱える時期でもあることを窺わせる。これは、自宅滞在時間中の自室使用時間が各時期のうち最も長いこと、一人になれる場所として子ども部屋を選択していると読み取ることができる。そのため、本人不在中の自室への出入りを激しく気にするという傾向もみられる。しかし、その理由は『親の自分への干渉が疎ましい』というだけではないようだ。子ども部屋についてこだわっている点があるかという質問に「ある」と答えたのが全体の4割であった。

「ある」と回答した中で、こだわった時期をみると、中

学期が4割近く、高校期になると5割を超える。さらに内容では『気に入った写真やポストカード、好きなアーティストのポスター等を飾る』『自分のコレクションを飾る』『自分の好みで部屋をコーディネートする』が上位を占める。自分好みの「マイギャラリー」として子ども部屋を捉えていることがわかる。高校期になると、親を遠ざける言動が目立つが、放任に対しては『親は自分に関心を持っていない』と不満に思うこともある。高校期は“自分の楽しみ”を見つけていることも多いので、それが親子の会話のきっかけになることも考えられる。

扉の開閉については、常時閉める子どもがしだいに増えてくる。そのため、“部屋に入ったきり何をしているか分からない”という親の不安が高まり、無断入室あるいは不在時入室が起これるのであろう。親と子の関係を悪化させる要因になる。

5. 子ども部屋における管理形態

1) 使用ルールと空間管理

子ども部屋を持つようになってから、親との間で何か約束事はあったかと尋ねると、「あった」のは全体のわずか28名、16%に過ぎない。子ども部屋の使用については子どもに一任されている証拠である。そのわりには、親が子ども部屋に出入りする頻度は高い。親子の信頼関係がきちんと結ばれていない上に、その関係を阻むかのように子ども部屋が存在しているのではないだろうか。

図 12 からわかるように、約束事のなかで圧倒的に見られたのが「掃除」「整理整頓」である。「掃除」は親が子ども部屋に出入りする口実の一つであり、日本では自宅内の掃除をするのは母親の役目で、高校期になっても大半が部

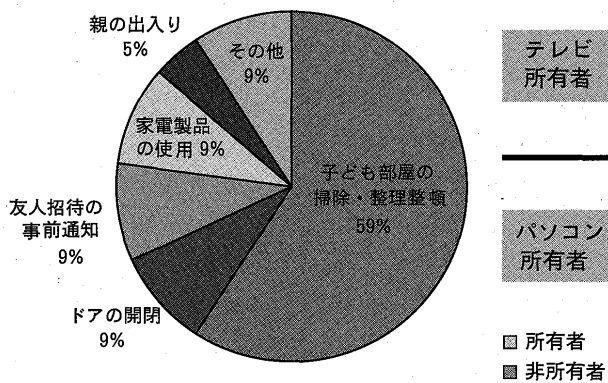


図12 子ども部屋使用に関する約束事

屋の掃除を母親に任せており、子ども部屋が“勉強部屋”として与えられている証拠になる。このような状況の一方で、『自分の外出時の出入りが気に入らない』、『勝手に部屋の掃除をした』という記述が見られることから、やはり子ども部屋の主導権が子どもになっていることがわかる。注目していた親の出入りに関しても、明確な決まりとして成立していたのはわずか1名である。

子ども部屋の空間管理については、所有意識が高い子どもが全責任を負うことが、自立のためのトレーニングになると考えられる。

2) パーソナル機器の導入と生活管理

親子のコミュニケーションがうまく取られていない子ども部屋は、“親の手の届かない空間”になりつつあるが、それに拍車をかけているのが子ども部屋へのパーソナル機器の導入である。現在テレビ、パソコン等の情報機器の発達・普及により、小学校の授業にもパソコンの使用について学ぶ科目が設けられている。子ども部屋にも高い率でこれらの情報機器が持ち込まれている。滞在時間を必要以上に増やす恐れがあるテレビやパソコンがどのような時期にどのような経緯で子ども部屋に持ち込まれているのかを調べた。

子ども部屋でテレビ・パソコンを所有している割合はそれぞれ4割弱である。そこで次は、所有に関して男女で差があるのかみると(図13)、テレビ・パソコンともに男子の所有率が高い。特にテレビに関しては、56%と半分以上が所有している。次に注目したのは、各導入時期(図14)とその理由である。

時期別のテレビとパソコンの導入率の割合をみると、見事に反比例している。テレビは小学期に持ち込まれることが最も多く、その理由も『自宅のテレビ買い換えで古いテレビを子ども部屋に設置』『自分の部屋でテレビが見たい』

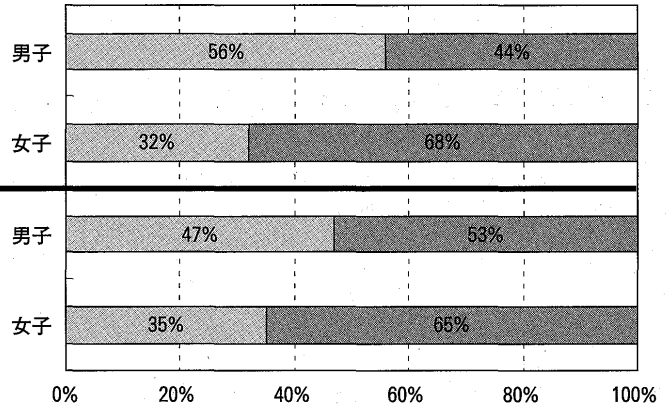


図13 男女別テレビ・パソコンの所有状況

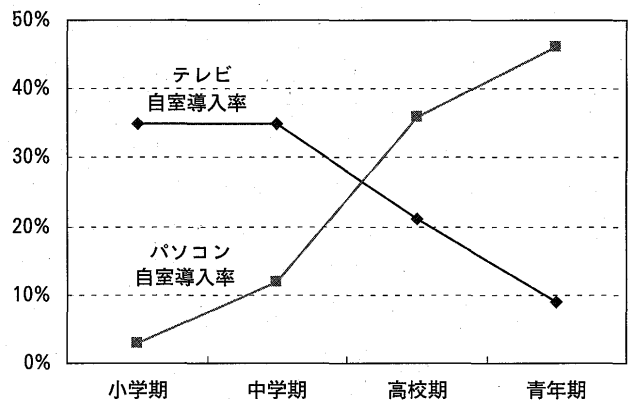


図14 成長時期別テレビ・パソコン子ども部屋導入率

という安易な経緯であるのに対し、パソコンはとくに高校期に導入率が高まり、その理由も『高校(大学)進学をきっかけに、後に備えておくため』『高校(大学)に入り、レポート作成のため』と必要に迫られた上でのことが多い。

子ども部屋へのテレビ導入の時期の早さとその理由は注目に値する。このあたりに子どもの孤立化を促進させる要因があるように思われる。テレビゲームに夢中になり昼夜逆転の生活を送るようになる、あるいはパソコンのインターネットに熱中し、大人の情報に振り回される、といった危険に曝されている。「一人になりたい」と欲して子ども部屋を確保しても、「うまく一人になれない」で、テレビやパソコンを通してバーチャルコミュニケーションを楽しみ、孤独感から脱しているのかもしれない。使用目的の錯誤、情報機器の過剰は、空間に人を縛り付けるひとつの脅威になるといえる。

子ども部屋の生活管理については、親が干渉でもなく放任でもない適度なスタンスで見守り、子どもの生活を把握することが肝要ではないだろうか。

6. まとめ

1) 子ども部屋に求められる要素と役割

以上から、子どもの成長段階に即した子ども部屋のあり方について明らかになったことをまとめる。

子どもの自立を支える子ども部屋に求められる要素は、

①プライバシー性と、②コントロール力である。

この2要素を決めるのは“親子関係”であり、“時期”であるということが分かった。子どものプライバシー意識の発達と共に、子ども部屋に対する認識が変化し、そこで行われる行為の重要度が異なり、パーソナル機器の導入が高まる。それと同時に親の依存的な管理から子どもの自主的な管理へと移行する。子どもの成長段階に応じて4つの項目のバランスを模式的に表すと、図15になる。子どもの成長段階として、いわゆる子どもから脱皮し始める小学後期、大人への目覚めがみられる中学期、完全には大人にはなれない高校期のなだらかな移行過程があり、これらの時期の親子関係と子ども部屋との関係が重要である。

子ども部屋に対する認識は、幼児期のモノの置場(図では省略)から遊び部屋、勉強部屋、そして自分の部屋、一人になれる部屋と変容している。小学期から中学期までは、所有意欲が強く、モノや空間に対するテリトリー意識が形成される。さらに高校期になると、空間の占有から先鋭化して時間に対するテリトリー意識が形成される。

つぎに、それぞれの時期における問題点を挙げる。

①小学後期 プライバシー意識が十分に発達していないにもかかわらず、パーソナル機器の導入が優先され、プライバシーに関して偏りがみられる。そのため親の管理が肥大化し、過干渉の状況を招く。

②中学期 プライバシー意識の発達とパーソナル機器の導入のバランスはとれている。管理に関して表面的には子

もの主導になっているが、実は親の隠れ管理が存在し、親子の信頼関係がくずれている。また、この時期から兄弟共有に関して生活時間のズレによる問題が発生する。

③高校期 プライベート性はバランスがとれているが、子どもの管理能力が発達せず、とくに生活管理に支障をきたしている。この時期は、子どものプライバシー意識は高まるがその代償の孤独には子どもが対応できないことや、親が管理に対して放任の方向に進んでいることなどが要因になっていると思われる。子どもの管理能力を高めるために、親子で空間管理も含めて生活管理に対してのルールづくりが必要となる。

子ども部屋は当初から子どもだけの空間ではなく、子どもの成長に合わせて親子でつくりあげていく空間である。また、子どもの自立のためのトレーニングスペースでもある。

2) ドアサインコミュニケーション —親と子をつなぐ扉—

そこで、これまでの内容をふまえ、子ども部屋の重要な指標となる、親子関係のつなぎ方を調節できる新たな扉を提案したい。

扉の開閉には、子どもからのメッセージが込められている。また、閉められた扉に関して、一人にして欲しいという思いだけでなく、本当はそんな自分を気にかけて欲しいという気持ちが込められていることもある。しかし、それらの気持ちが伝わりにくいのは、一度締め切ってしまうと中の様子が全く外に伝わらないからである。こうした扉の形状を工夫することで、親子間の意思疎通を図ることを考えた。

自分のモノへの所有意識から空間に対する認知が始まるので、最初から扉つきの部屋を与える必要はない。扉が開放されている方が、室内で子どもが何をしているか、親に

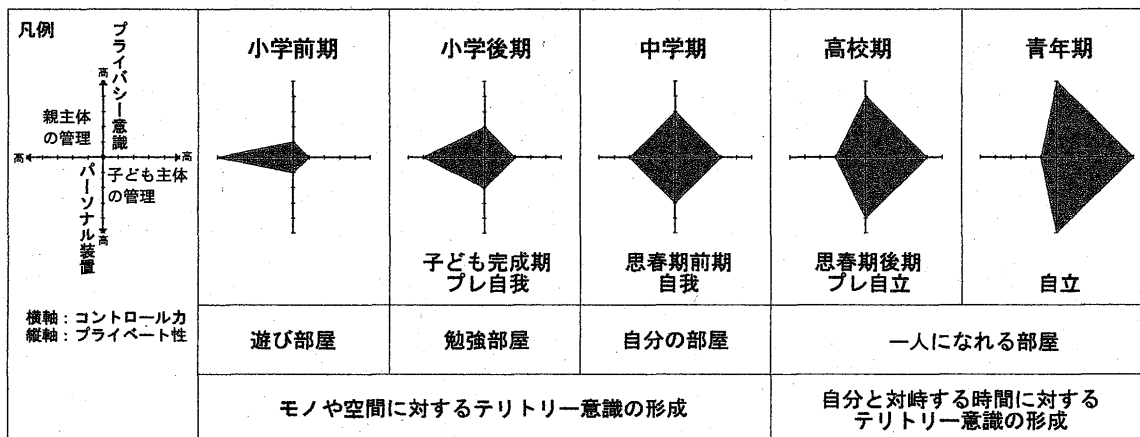


図15 成長時期別子ども部屋に求められる要素と役割

も分かりやすい。そして必要を感じた時につける扉も、それまでつながれた空間を一度に遮断するようなものではなく、徐々に、プライバシーを高めてゆけるようなもの、段階的な変化をつけられる形がよいのではないだろうか。現在、一般的に用いられている一枚の板を取り付けたような扉を、「心の窓」と比喻されるような窓の様態にする。つまり、扉の素材を半透明なもの（摺りガラス、アクリル樹脂板、障子など）にして、子ども部屋の気配が感じられるようにする。時にはカーテンやブラインドなどを用いて閉めきることでプライバシーを保持する。

子ども部屋の扉は親子の境界線である。開けるか閉じるかといった二者択一ではなく、子どもが自分の気持ちを表現する際に幅を持たせることが可能な扉の形態にすることで、親が子どもの気持ちを汲み取る機会が増え、子どもにとっては扉の使い方を一任されれば、“自分は親から信頼されている”という自信を得やすい。さらに、子どもは“みられる”ことを意識して自分の生活を律するきっかけになる。こうすることで、親と子がありのままに向かい合う機会が増え、本来の親と子の関係を築くことが出来るだろう。

家族間コミュニケーションの重要な一翼を、言葉ではなく、扉（建具）が担うのである。

参考文献

- 1) 尾木直樹, 「学級崩壊」をどうみるか, 日本放送出版協会 (1999)
- 2) 高橋道子, 藤崎真知代, 仲真紀子他, 子どもの発達心理学, 新曜社 (2003)
- 3) 小嶋秀夫, 児童心理学への招待—学童期の発達と生活—, サイエンス社 (2002)
- 4) 武藤隆 (編), 発達心理学入門 I—乳児・幼児・児童, 東京大学出版会 (2001)
- 5) 岡堂哲雄 (編), 家族関係の発達と危機, 同朋社 (1989)
- 6) 川端啓之, 杉野欽吾, 後藤晶子他, 発達心理学, ナカニシヤ出版 (1995)
- 7) 松田妙子, 家をつくって子供を失う, 住宅産業研修財団 (1982)
- 8) 宮脇檀, 新・3LDKの家族学—子供に個室はいらない—, グロビュー社 (1982)
- 9) 横山彰人, 子どもをゆがませる「間取り」, 情報センター出版局 (2001)
- 10) 外山知徳, 住まいの家族学, 丸善 (1985)
- 11) すまいろん 1990 夏号, 住宅総合研究財団 (1990)
- 12) 北浦かほる, 世界の子ども部屋, 井上書院 (2004)
- 13) 中村文夫, 子供部屋の孤独, 学陽書房 (1989)
- 14) 藤原智美, 子どもが生きるということ, 講談社 (2003)
- 15) 佐々木隆三, 永守良孝, 事件 1999-2000, 葦書房 (2000)
- 16) 片田珠美, 17歳のころ—その闇と病理—, 日本放送出版協会 (2003)
- 17) 村山士郎, 事件に走った少女達, 新日本出版社 (2005)
- 18) エセル・S. パーソン, 人はなぜ空想するのか, 翔泳社 (1997)
- 19) ガストン・バシュラール, 空間の詩学, 筑摩書房 (2002)

(たけだ きみこ 生活環境学科)

(こもり ゆうこ 平成17年度生活環境学科卒業生)